

# VARÓN DE DIOS

## (神の人)

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団  
九州教区 壮年部 2021年12月号

ハレルヤ！主の御名を賛美します。  
九州教区内の壮年部の皆様、いか  
がお過ごしでしょうか。

早いもので 12 月になりました。  
残すところ数週間ですが、今年はコ  
ロナ感染に翻弄された 1 年でした。

最近福岡県の感染者数が一桁に  
なる日もあり、この状態がこのまま  
続くように願っています。しかしお  
隣の韓国やヨーロッパ、ロシアなど  
では感染が再拡大しており、また新  
たにオミクロン株が登場して来て、  
12月7日現在で3人の感染者が日  
本でも出ています。多くの国からの  
日本への入国が禁止されるなどの影  
響があり、今後も安心はできません。

先月教会に届いたチラシの中に、  
「教会に与えられた『共に集う』機  
能の回復を祈ろう！」という見出し  
の文がありました。サタンが新型コ  
ロナを用いて、教会に与えられた  
「共に集う」機能を奪おうとしてい  
ると書かれていましたが、本来教会  
は「三密」の交わりをする場所  
です。「ソーシャルディスタンス」と言  
って互いの間に距離を取るのではな  
く、互いの手を取り合って祈る所

す。ズームやYouTube を使ったの  
礼拝は便利ではありますが、この形  
がいつまでも続くべきではないと思  
います。世界中でコロナ感染が早く  
終息するようにと神様に祈り求めて  
いきましょう。



さて今回は、佐賀  
県伊万里市にある  
「伊万里いのちの  
ことばキリスト教  
会」の2人の方の証  
です。

「伊万里いの  
ちのことばキ  
リスト教会」  
はこれまで単  
立教会でした  
が、2017  
年4月に教団に正式加入しました。



### 「多様性の時代の個人伝道について考える」

平井 寿昭

私は、地域のが  
ん診療拠点病院に  
精神科医として勤  
務し、精神腫瘍学  
(がんなどの死を  
予感させる病気を  
負った人々への心  
のケア)に最も重点を置いて診療を  
行っています。



当然ながら、現実のものとして近  
づいて来る自身の死を前にして、多

くの人が不安や抑うつに陥ります。

それに対する対処には、死の事を考えるよりも残された時間をどのように生きるかに目をとめたり、その人の尊厳を最大限に引き出せるようにしたりと様々なアプローチがありますが、どうしても、死というものの得体の知れなさがやっぱり怖いという人は居ます。私はそのような人の為に、そもそも死とは何なのかと一緒に考えてあげることもあります。

人生は一回だけなのか、それとも輪廻転生のように死と再生を繰り返すのか？人は死んだら何も無くなるのか、それとも靈魂のようなもので存在し続けるのか？もし靈魂のようなものが残るとすれば、それはどこに行くのか？既に亡くなった自身の親戚や家族はどうなったのか？等々の問いについて考えてもらいながら、その人なりの仮の死生観を選んでいってもらいます。

実はこの過程の中で大抵の人は、これまで行ってきた死者の為の儀礼や、断片的に信じてきたことの中に、大きな矛盾があることに気づきます。

そして、最終的にその人が選び取った死生観の中で、死の恐怖への慰めは何なのを考えてもらいます。この部分は世界の多様な宗教が参考になります。それでその人が満足できればそれでよしとし、満足できなければもう一度最初にもどって死生観の選択の再検討を助けたりします。

これはあくまでもその人の主体性を重んじて行い、こちらが特定の考えに誘導することはしません。ですから、患者さん自身は、最終的に私の死生観や信仰信条とは異なるものに行き着くことがほとんどです。

これは一見、キリストの福音を伝えるということからは随分かけ離れたものに思えるかもしれませんが、私自身は意味のあるアプローチと考えています。矛盾した死生観を整理し、真理に耳を開く為の土壌づくりとなると思うのです。

また、一部の人がキリスト教的死生観を知る機会ともなるでしょう。実のところ、イエス・キリストの福音による救いは、創造主である唯一の神、キリストの死と復活、人間の罪とその赦し、信者に与えられる永遠の命、神による最期の審判などなどがひとつのパッケージとなっていて、それらをまとめて信じ受け入れる必要があります。しかし、もともとキリスト教に馴染みの薄い日本人が、そのパッケージの一部を示されただけで、「こんな話は聞く価値が無い」と思って耳を閉ざすのは良くあることです。

いま、全国でアドバンス・ケア・プランニング(ACP)(別名「人生会議」)が推進されています。その中で多くの国民が自身の死のことを考えることとなります。このような機会にクリスチャンが隣人の死生観の見直しを手伝うというのはどうでしょうか。

## 「節目の年にあたって」

永吉 正彦

今年は還暦を迎え、定年退職の年です。60歳を迎えたという実感はわかりませんが、視力が乏しくなったり、膝や腰など節々が痛くなったり、やはり年をとったのだと思う今日この頃です。



しかし末の子どもがまだ高校3年生で、このままリタイアするわけにもいかず、もうしばらくは再任用で仕事を続けることになりそうです。

ただ定年と同時に役職は解かれるため、いくらか気持ち的には楽になるかもしれませんが、しばらく携わっていない事務的な実務に従事することになるので不安も感じています。

定年を一つの区切りと考えると当教会も献堂25周年を過ぎ、私自身も洗礼を受けてから30年が経ち、いろんな意味で節目の年なのだと感じています。

節目といえはここ数年コロナウイルス感染症の影響で教会の活動も、参集しての礼拝会ができなかったり、人を集める伝道集会が開催できなかったり、様々に制限されています。思うように活動できない時期が続いたため、伝道の働きの在り方も転機を迎え、新たな方策が求められています。

す。スマートフォンを用いてリモート礼拝を行ったり、SNSによる教会活動の発信など、時代のニーズにあったやり方も取り入れていく必要があります。

地方教会の高齢化が進み、若者を呼び込むためには非常に有効なのかもしれません。ただトラクト配布や少人数での家庭集会など、今までに行ってきた地道な伝道活動も忘れてはならないのだと思っています。

話は変わりますが、今年の冬は寒くなるという長期の天気予報が出されています。私の家には薪ストーブを設置していますので、11月は冬支度の真最中です。



薪は購入すれば簡単に調達できるのですが、かなり高いのです。購入して燃やすことは、薪とともにお金を燃やしているようなものなので、我が家では山から木を切り出している方をお願いして分けてもらったり、チップ工場から安く原木を譲ってもらったりして、自分で薪割りから行っています。年を取るとかなりの重労働ですが、薪割りは趣味と割り切ってコツコツと取り組んでいます。

アメリカのことわざ「薪は3度人を暖める」というのがあるそうです。1度目は薪割の時、2度目はストーブに当たっている時、3度目はス

トープで調理された料理を食べている時です。炎を眺めているだけで心が癒され、人の心を暖めるため4度暖めるということもあるそうです。

今は暖かい冬を迎えるために汗をかいていますが、もうひと頑張りが必要なようです。

さて話はもどりますが、地道な伝道活動として当教会では年3回程度トラクト配布を実施しています。つい先日も兄弟姉妹10人で、市内中心部の家に配布を行いました。どなたがトラクトに興味をもってくださるか、どのような反応があるか知る由もありませんが、収穫の主が時期が来たら、たくさんの収穫を行って下さることを信じて、忠実に種まきを続けるのみです。その中で一人でも救われる方が起こされれば、それはとても喜ばしい事です。

先ほどの薪の話ではありませんが、人が救われると3つの歓喜に満ちあふれると思います。1つ目は救われた本人が罪の赦し、永遠のいのちが与えられる喜びに満たされること。

2つ目は伝道の働きに携わった兄弟姉妹が、人が救われたことの喜びに満たされること。3つ目は天で大合唱が沸き起こり喜びに満たされることです。コロナ禍という新しい時代の節目に、地方教会として今できることを忠実に行っていく必要があることを再認識して、節目の年を過ごしていきたいと思っています。

「収穫は多いが、働き手が少ない」  
マタイ9：37

「小さい事に忠実な人は、大きいことにも忠実である」  
ルカ16：10



この機関誌が壮年部の皆様のお手元に届くころには、それぞれの教会でクリスマスの準備が進んでいると思います。普通クリスマスメッセージでは、聖霊によって身重になることを受け入れたマリアの信仰が強調されがちですが、婚約者のヨセフにも習うところがあります。マタイ1:19~22 を読みますと、マリアとの婚約破棄まで考えていた彼は、夢に現れた天使のことばを聴いて、結婚を決意します。もしこの時ヨセフが離縁していれば、「メシアはダビデの家系から生まれる。」という聖書預言は成就しません。ダビデの家系はヨセフの方だからです。つまりお生まれになったイエス様は、メシアではないことになってしまいます。

年若いヨセフとマリアの信仰を思いめぐらしながら、クリスマスの時期を過ごしましょう。(文責 松尾)

九州教区 壮年部担当 松尾 敬文  
福岡市東区水谷 1-14-3  
福岡キリスト教会 092-681-5501